

安政江戸地震にみる武家地被害

安政江戸地震は、安政二年(1855)十月二日(11月11日)夜四ッ時(10時)ごろ発生した江戸直下型の地震であった。地震の規模はM6.9と推定されている。この地震の被害は江戸の街全体に及んだが、その被害総体をとらえることはなかなか難しい。これほど江戸に対する関心が高まり、江戸の街々の細部に至るまでわかってきたと考えられている現状では、一見不可解なことと思われるかもしれない。たしかに、江戸の町方、つまり町人地として江戸町奉行の支配を受ける地域の被害については、町名主の調査を基にした一応信頼できる数値がある。それによれば、倒壊家屋14,346軒 1,724棟、倒壊土蔵1,404、死傷者約7,000人に及んだ。

ところが問題は、江戸のほぼ65%を占める武家地の被災状況については、根拠となるデータが極めて不足しているのである。とはいえ、ある程度の努力をすると、大名屋敷の自主的届出による被害数については、266藩のうち被災藩117藩、邸内圧死、焼死者 1,860人、また、類焼藩邸数23藩という数値が得られる。しかし、これは、強制力を伴う調査によるものではなく、慣例に基づく任意の届出であるから、今後藩文書などが発掘されれば増えることもあり得る数値である。その上注意しておかなければならないのは、大名屋敷の死者だからといって、すべてが武士身分の者とは限らないという点である。

たとえば、日比谷御門に近い鳥取藩邸では圧死、焼死79人を出したが、このうち19人は、小人役こびとを勤めるため本国から調達され単身出府していた百姓たちであった。また、被害の激しかった本所に藩邸が集中していた津軽藩では、火災は免れたものの、圧死者79人に及んだ。このうち9人の者が、掃除小人として本国から調達されて出府していた百姓であった。

こうした事実、幕府への届出のような公的史料ではなく、藩の内部史料を得てはじめて明らかになった事実である。

ところで、俗に旗本八万騎といわれる幕臣層の

被害はといえば、これは大名屋敷よりもさらにわからないことばかりである。

幕府が幕臣たちのうち被災者を救済するために出した震災給付金の受給者は、旗本 4,488人、御家人12,966人であった。これによって、その被災率は一応80%強と考えられる。

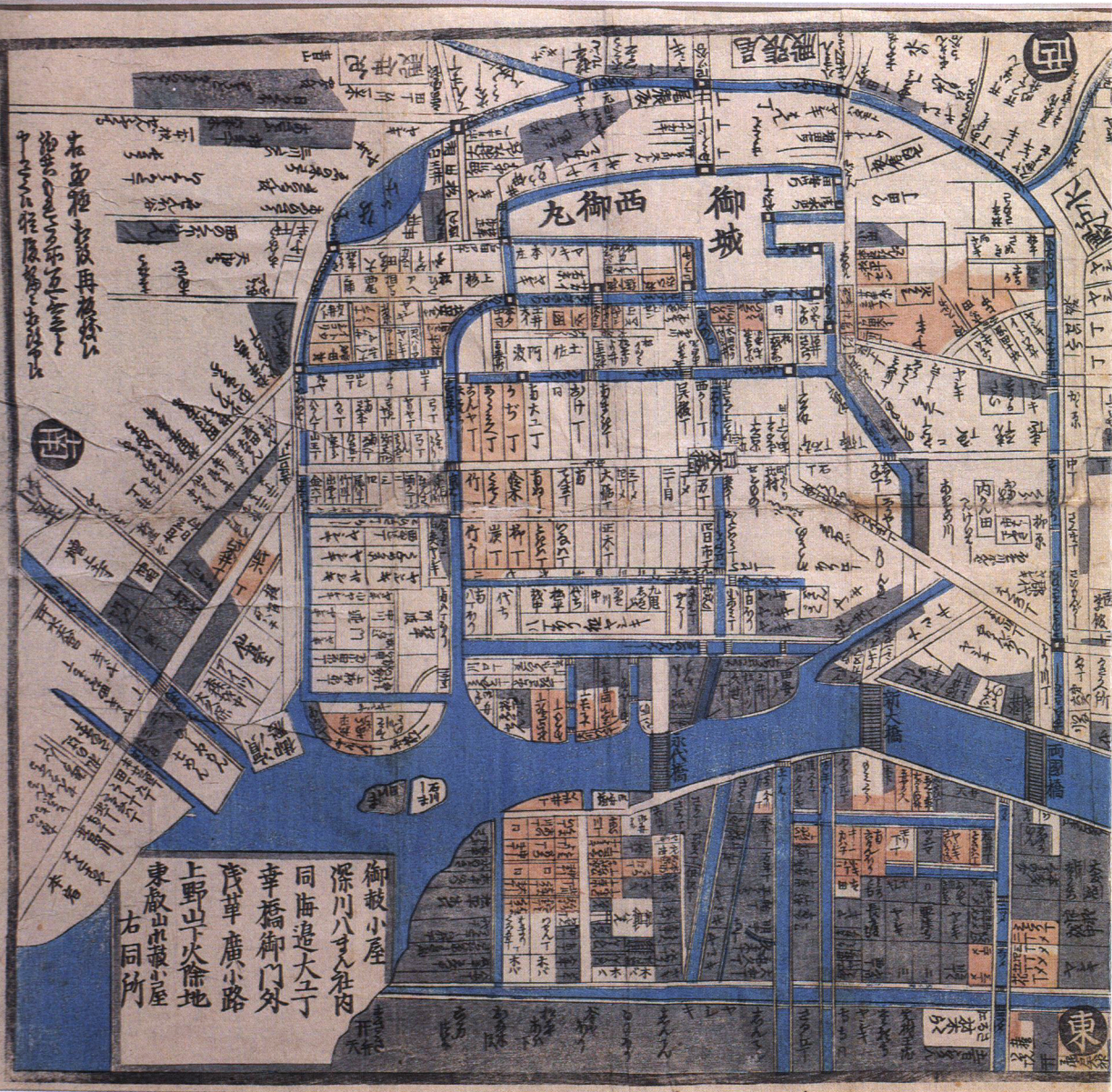
が、人的被害については今のところ信頼すべきデータが見いだされていない。第一、地震発生のこの年の旗本、御家人の正確な数がわからないのである。また、彼らはその分限に応じて陪臣を抱えていたはずであり、そうした人々のなかにも多数の死傷者が出たはずであるが、その基本的データも被災状況もわからない。

わからない、わからないといささか心が重くなるようなことばかり指摘してきたが、道がないわけではないのである。

たとえば、ここに掲載の瓦板類を傍証として利用することも考えられる。当時こうした瓦板類は多数発行された。欄外に「十月廿八日極改」と但書がなされている。これは、地震発生から約三週間余を経た段階で、詳細に調べ直して板行したというキャッチ・フレーズである。こうしたキャッチ・フレーズが意味を持つ背景には、当時の人々もより信頼できる情報を求めてこうしたものを買ったということが考えられる。ここに記された崩場所、焼場所などは、他の文書史料と併用すれば、新しい事実が発見できたり、被災の状況が文書史料だけの段階より、より一層明確になるという可能性は充分にある。

江戸の武家地は、町人地と違い、俗称はあっても町名はない。したがって、文書史料に武家地の町名が記されていても、具体的に、どの地点を示すのかわからない場合も多いのである。こうした崩場所、焼場所の図示された絵図類はその悩みを解消してくれるものでもある。瓦板だからといっていい加減な情報と一概にいけないということはずでに常識でもあるのだから。

桐朋学園短期大学講師／北原糸子



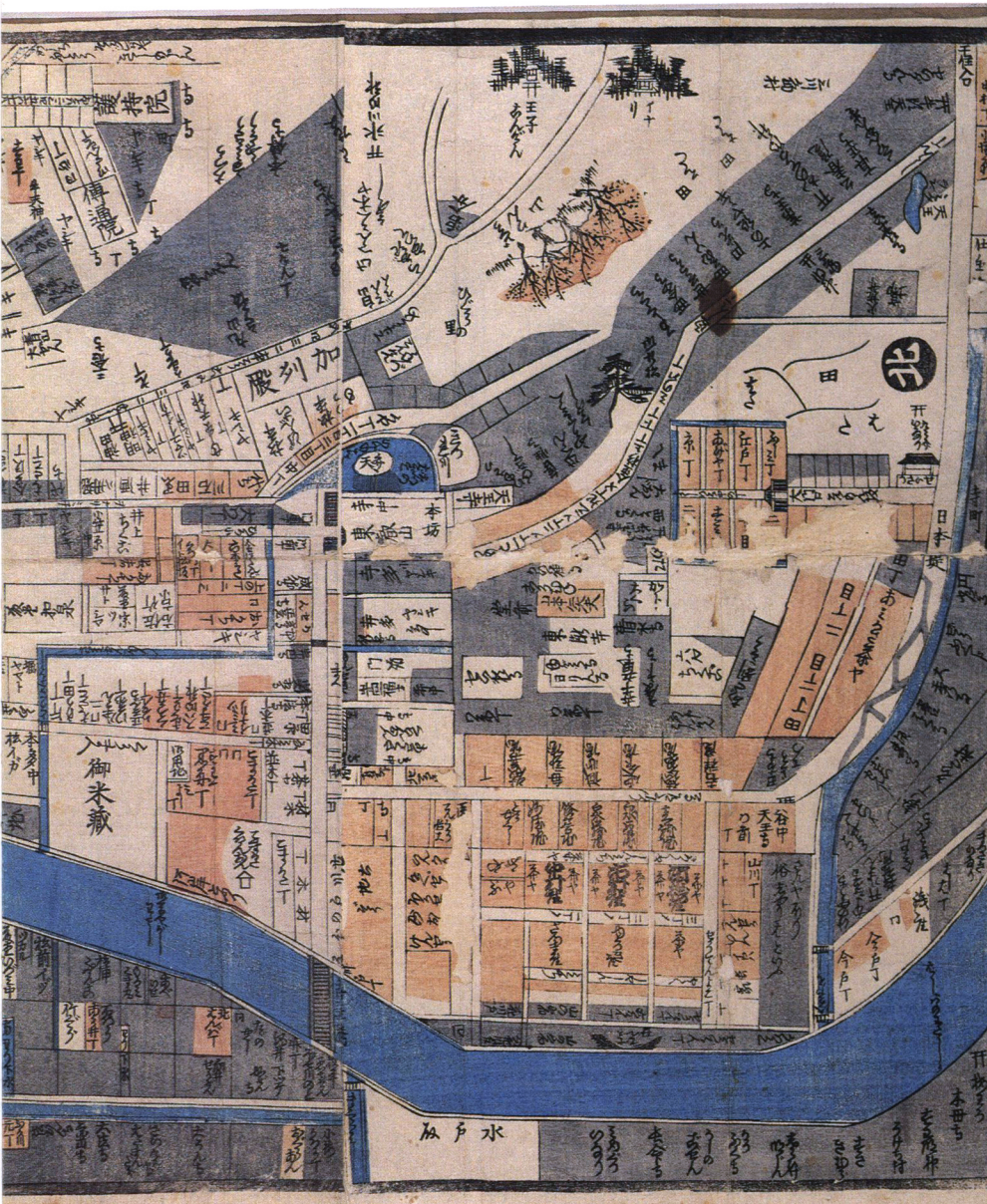
右面種々改修再修あり
御城の北に五ノ宮と
申すは往時御城の北に

御被小屋
深川八ヶ内在
同海邊大丁
幸橋御門外
茂草廣小路
上野山下火陰地
東蔵山麓小屋
右同所

十月廿八日 極改

安政二卯年
十月二日夜

地震大花場所集圖



地震大花場所一覽図（東京消防庁蔵）